

富山家庭裁判所委員会（第3回）議事概要

1 日時

平成16年8月25日（水）午前10時から午後零時まで

2 場所

富山家庭裁判所大会議室

3 出席者（五十音順，敬称略）

(1) 委員

東 博幸，加藤愛理子，手崎政人，塚野州一，辻勤治，布村武信，前島勝三
（委員長），吉浦邦彦，和田悟

※ 湯 麗敏は欠席

(2) 事務担当者

太田事務局長，安部首席家裁調査官，高橋首席書記官，花井事務局次長，青
木総務課長，大塚総務課課長補佐

4 進行次第

(1) 委員長あいさつ

(2) 委員の交替について（自己紹介－手崎委員）

(3) 議事

ア 委員長代理の指名

手崎委員（富山家裁判事）を指名

イ ビデオ視聴（27分）

「少年審判～少年の健全な育成のために～」

ウ 庁内見学（同行室，審判廷，調査室）

エ プレゼンテーション（安部首席家裁調査官）

「家庭裁判所からみた『少年を取り巻く社会環境及び少年の現状』」

オ 意見交換

テーマ「少年を取り巻く社会環境及び少年の現状」

内容は，別紙のとおり

(4) 次回テーマ

今テーマの続行に加えて，「少年事件における処遇」を取り上げることとし，
詳細は追って連絡することです承された。

(5) 次回開催日時

12月10日（金）午前10時から午後零時まで

(別紙)

意見交換 (■委員長, □委員)

- ビデオ及びプレゼンテーションを参考にして、少年を取り巻く社会環境を、「家庭環境」、「学校又は職場環境」及び「地域環境」の面から、また、少年の現状について、委員それぞれの立場からの御意見を伺いたい。
- 家庭では、子どもの思いを両親が聞いてくれないということだ。家族の団らんが少ないからだろう。子どもたちからの電話相談を受けているが、相談内容で一番多いのは「学校生活」についてである。親友がいない、教師もサラリーマン化していて相談できないということだ。
- よく普通の家庭というが、何の問題もない家庭はない。親は、ただ学校へちゃんと行っているというだけで、うちの子は問題がないと思っている。何か問題が起きて初めて、家庭内の問題が暴かれる。
- 少年犯罪の実態についてみると、凶悪化しているという印象を持っているが、実際には殺人などの件数は以前と変わっていないとも聞く。事件数はどうなっているのか、家裁の役割を考えるに当たって知っておきたい。
- 最近では、少年事件に弁護士が関わるのが少なくなったように思う。法律扶助協会としては年間予算を確保しているが、全部使い切れていない。法律扶助制度の周知が不十分なのかもしれないが、裁判所で付添人に関する統計はないのか。
- 統計的なことは次回までに検討する。
- ちゃんと子どもと向き合わない大人の姿勢が問題である。大人の無責任に対する不信感が大きい。
- 不登校の小中学生の数が、全国的には減少しているのに富山県内では前年より1.4パーセント増えたという新聞記事があった。学校にはスクールカウンセラーも置かれるようになったが、以前に比べて、学校や教師から生徒への働きかけがうまくいっていないように感じる。言葉がうまく伝わらないのではないか。
- 子どもと言葉が通じないと感じることはよくある。それは大人に対する不信感があるからだと思う。上辺は明るくても内面は悩んでいる子が多い。それを感じられる大人であるべきだ。
- 市民相談を担当しているが、隣家とのトラブルの相談が多い。このようなことは、以前は町内会長が注意をしてその地域社会で解決できた。今は、相手から恨

まれたくないので行政で解決してくれという。全国的に見て町内会の組織率が高いと言われている富山でも、それほど地域社会の連帯が薄くなっている。そんな大人の姿勢が子どもにも伝わっている。

□ 子どもの意見が地域で吸い上げられていない。